

七友会なごよみ

新たな出会いの時に



七友会会長

佐原和典

一日と暖かさが増し、花の便りも聞かれる頃。九州福岡では白梅や紅梅、菜の花も咲きはじめました。岩手よりも一ヶ月以上早い気候ですが、どこにいても陽が暖かく感じられてくるのはうれしいものです。

卒業を迎えた会員のみなさん、おめでとうございます。同窓会では三年前から就職活動の一助として同窓生と在校生との交流会を開いてきましたが、最近の社会、経済の変動は今まで経験したこともないものであり、職を選ぶ上でも大きな影響を与えたのではないのでしょうか。そんな中でまず第一歩を踏み出されたことに拍手を送ります。自分の選んだ道を信じて進んでいってください。

想い出多い大学生活を離れ、就職されるわけですが、社会人になるということは何も皆同じ状況に飛び出していくものではなく、さまざまな社会、経済上の自立した活動の一総称にすぎないと思います。多くの人は民間企業に職を求めたり、種々の公務員へ進まれたりするわけですが、なかには今回寄稿してくれた三上君のような出会いや生き方もまた確かな一社会人なのです。大学を出て平凡な生活を送っていくのも人生でしょうし、世界を観て地球に触れて生きていくのも人生です。が、二十代から四十代にかけての時期をいかに生きたか、納得のいく充実したものだったかが、その後に大きな影響を与えていくのだと思います。

ここ数年卒業後の進路をみていますと、民間よりも公務員へ、中央よりも地方（地元）へと向いています。それはある意味では優秀な人材が地方に残るといふことかもしれませんが、一方で、小さな世界から一歩踏みだしていく勇氣を失ってきているのではないかと思われまふ。変動の時を迎えた社会ではいつまで公務員が安定したものであるかも不確定です。一昔前に流行った「不確定

題字 大畑莊一氏
平成10年3月23日発行
岩手大学
人文社会科学部同窓会
第13号

性の時代」がまさにやって来るのかもしれない。ただ、日本だけがいつまでも特別でいられるわけがないことは確かですし、社会の端々でそうした動きを見つめながら日々生き抜いていくのが私たちであることも間違いありません。いま大学や学部のあり方が問い直されているように、また私たちの生活そのものも問い直されているように思います。

二十一世紀はもうすぐそこです。新社会人となる皆さんへ、大きな世界へ羽ばたく氣概を忘れず、新たな出会いの場へ勇氣をもって進まれることを一先輩として願っています。世の中、決まった道がないからおもしろいのです。

目次

新たな出会いの時に	1
「初心」を忘れずに	大畑 壯一 2
或る海外生活体験	三上 雅弘 2
お知らせ	
退官する先生方	3
同窓会報告	
大同窓会in東京ベイヒルトン	4
親睦会in盛岡	4
評議委員会予定	4
あとがき	4

「初心」を忘れずに

岩手大学名誉教授

大畑 莊 一

われわれにとって春はいろいろの思いに胸膨らみ、また新たな試練のときでもある。大学生たちが長い間の学生生活から解放されて新しい職場に就くということは、それぞれの人生に重大な転機の時期でもある。

諸君はさまざまなことをこれまでに体験されたことであろう。程度の差はあれ、それぞれにある程度の専門的知識も身につけられたことと思うが、しかし、それをもって専門家になったとはいえない。本当の勉強はこれからである。

私事を記して甚だ恐縮だが、長女の孫は大学院を卒業し、この春から医学部付属病院に勤務が決定、さらに次の孫は博士課程を修了して研究所に勤務することになり、次女と三女の孫たちはともに外国の大学に留学が決定するという、誠に慌ただしい春を迎えることになった。

さて、就職とは仕事を通じてさまざまな人間集団に属し、また関係をもつことだと思ふ。特に、わが国の社会でどのような人間集団と関わり合いをもつかは、その人の生涯に計り知れないほどの影響があるだけに、その第一歩を大切にしていくな必要がある。会社という人間集団も、社会的仕事

を遂行する組織機能集団であるとともに、社会人として生きていくための共同体でもある。この共同体の一員であるという自覚が就職する一年生には最も大切なことであると思う。この共同体の連帯意識のなから職業人としての道が開けてくるのである。さらにまた、それぞれの職業を通じて具体的に社会生活に参加されることによって、未知なるものへの期待と幾分かの不安と緊張を覚えておられることと思う。この感覚を「初心」といってもよいであろう。

とかく人間は誰でも、えてして物事に慣れると「初心」を忘れがちである。何事にも熟練することが大切なことはいまでもないが、それによって「初心」を忘れ、新鮮な驚きや好奇心、慎みや畏れなどの感覚が働かなくなることが当たり前になることがしばしばある。こうなると、あとは情性で生きるということになる。これでは向上進歩は止まってしまふ。これを本当に生かすためには、人間らしい「初心」の感性、感覚をいつまでも損なわず、それを豊かに働かせることだと思ふ。

この春、学校を巣立ち新たに社会人として出発される諸君に、老婆心ながら、はなむけの言葉として一言申し上げた次第である。



或る海外生活体験

三 上 雅 弘 (第三期生)

大学在学中は皆様に多大なご迷惑をおかけしておりました三上です。ご無沙汰しておりました誠に申し訳ありません。なんとか生きております。

学生の頃、時折これから先どうなるのかなあとほんやり空を見上げることがありましたが、それは未だに変わっておりません。卒業時に就職先はこれといってなく、のんびりとしておりました。

山岳部の後輩で農学部生が青年海外協力隊の募集要項を持っていて、これを目にしたのが海外とつぎあいの始まりです。協力隊とは農林水産分野だけだと思っておりましたが、広範囲にわたる分野をこの時初めて知りました。

私の志望した職種は「考古学」です。なんとか試験に受かり、人間博物館みたいな各種面白い人たちとの訓練所生活を経て、中米ホンジュラスに赴任しました。国立人類学歴史学研究所に所属し、マヤ文明の遺跡調査プロジェクトに参加。先輩隊員は皆、新大陸考古学の専門家ばかりで、何でこんな場違いなところに来てしまったのかと当初は少し焦りました。しかし、野外での遺跡調査は山岳部出身の私にとってこの上なく楽しいもので、毎日が冒険旅行のようでした。また、現地の人たちとも今思い出しても心温まる交流がありま

した。そのうちなんとカスペイン語で論文が書ける程度にもなりました。大学を出たばかりの若造がいきなり日本代表という看板を背負って働くわけですから、もの凄いプレッシャーでしたが、自分の各種未発達部分を創造する機会に恵まれたことは幸運だったと思っています。

それまで日記などろくに書いたことのなかった自分が、ホンジュラスでの二年間は毎日ロウソクの光の下でも書いておりました。それだけ精神も高揚し、ある意味で充実した日々であったのかなあと思ったりもしています。最近の日本では徐々に希薄になってきている、生臭いのみならずしく、すがすがしい光景を体験できたことに幸せを感じます。

思っていることを思い通りにできる時代は、個人史の上ではそう多いものではありません。今年卒業される皆様にとって、この時代は重たくて、とても大切な時代になるはずです。大事にしてください。

さて、海外の甘い汁を吸ってしまったため帰国後日本での仕事はきびしいものでした。自分で制御できないストレスというものを初めて体験し、会社を辞めました。しばらくのんびり過ごしていたら、周りの人たちが心配して仕事を紹介してくださり、今度は国際協力事業団（JICA）の林業プロジェクト専門家（プロジェクトコーディネーター）として南米ペルーに赴任することになりました。当時のペルーはテロ活動が激化してお

り、プロジェクトサイト周辺も次々に襲撃される状況下でなんとか活動を続けていました。銃撃戦の中を車を走らせたこともあり。結局、治安悪化によってプロジェクト期間を短縮させ帰国しましたが、テロ組織セネデロ・ルミノソンにペルー野菜種子センターが襲撃され、日本人専門家3名が殺されるという悲惨な事件が起こったのはその後まもなくのことです。

次に、チチカカ湖の水産プロジェクトの専門家として南米ボリビアに赴任しました。当初二年間の派遣予定でしたが、結局五年間いました。それほどこの国が好きになりました。第一子もラパスで誕生。休日は標高六千メートル級の山脈をトレッキングしたり、民族色豊かな地方を旅したり、フォルクローレの音楽に浸ったりしました。透き通った神々しいほどの青い空、それがしだいに紫色に変化していく夕暮れの下、本当の人間に出会っておりました。

帰国後は実家で体調を崩していた母親の看病をしていましたが、一段落したところで上京、東京の片隅で暮らし始めています。現在は第二子も誕生し、妻の育児の手助けをする毎日です。二年近くのんびりしているの、そろそろ働かねばと思っています。今度はどんな風が吹くのでしょうか。自分は今、かすかに吹いてくる風をふと見上げています。

お知らせ

人文社会科学部では、本年3月にて、次の先生方が定年退官されることになりました。

佐藤 文子 先生（人格心理学）

早坂 啓造 先生（経済理論）

福原 亨一 先生（政治学）

樋浦 順 先生（物理学）

また、次の先生方は他大学へ移られる予定です。

細江 達郎 先生（社会心理学）

小林 毅 先生（金融論）

高橋 幸雄 先生（英米言語文化）

訃報 小池 稔先生

すでに新聞や七友会ホームページでご存じの方も多いと思いますが、名譽教授であり前学部長の小池稔先生（哲学）が胃ガンのため、平成九年十二月十七日に亡くなられました。頬に手を当てながら言葉を選び、語りかけるように進める先生の授業が思い起こされます。また「講義ばかりが学問の場ではないんだよ、君」とおっしゃっていたことが今でも忘れられません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

なお、小池先生は同十二月、幅広い視野による哲学教育と研究、地域における哲学思想の普及ならびに大学運営において果たした指導的役割などの功績により、勲二等瑞寶章を叙勲されています。

同窓会・親睦会報告

大同窓会 in 東京ベイヒルトン

学部設立二十周年を記念し、平成九年十一月二十四日東京ベイヒルトンにて関東支部主催による同窓会がおこなわれました。連休でもあり、ドイツ・スウェーデンのそばということで、たくさんの方の参加を期待していましたが、昨年とほぼ同じ三十五名ほどで少々残念でした。しかし、親子連れや夫婦での参加あり、帰国後はじめて参加したという人あり、賑やかで和やかなものとなりました。転職した人や会社を興した人など、社会的変動のなかでのさまざまな経験や出会いを語り合い、最後はビンゴゲームで盛り上がり、次回の再会を約束して閉会しました。

東京では毎年同じ時期に同窓会を開く予定で、関東周辺の会員の情報交換や異業種交流の核になればと考えています。関東支部支部長は日本旅行上野支店の塩田勝美氏、事務局は池袋法律事務所山口毅氏となっておりますので、気軽にご連絡ください。支部長によると、七友会会員対象の旅行の割引特典（上野支店塩田氏のみ取扱）などもあるそうです。

*七友会関東支部 連絡先

山口 毅（池袋法律事務所）

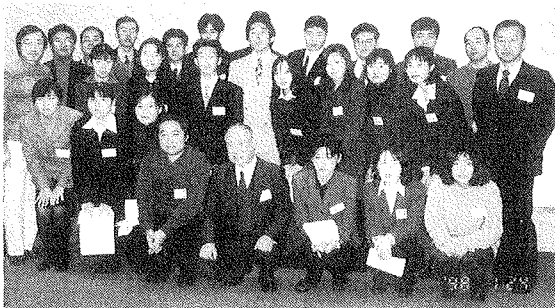
TEL 〇三（三九八七）一一七四
FAX 〇三（三九八七）一一五七

親睦会 in 盛岡

盛岡での同窓会は在校生との交流会というかたちで一月二十四日（土）南部会館で開催されました。在校生は三年生中心に十五名ほど参加しましたが、同窓生の参加が予定よりもかなり少なく、淋しい気がしました。しかし、職をいかに決めるか、仕事に対してどう対処していけばいいかなど、学生の皆さんからOBに対する積極的な問いかけがあり、開会と同時に活発なやりとりがおこなわれていました。就職協定がなくなつたことや不景気のなかでの職選びということで、特に女子学生が真剣に話を聞いていたのが印象的でした。

年々就職活動のスタートが早まってきたので、来年度の開催については時期や方法を再考することになります。

とはいえ、雪の盛岡にて、同窓生同士の語らいは深夜まで続きました。



評議員会開催について

評議員会を次の日程で予定しています。現在評議員をされている方だけでなく、どなたでも歓迎いたします。ご出席の上、積極的な意見をお寄せください。なお、会議終了後には親睦会を考慮しております。（つなぎ温泉での宿泊含め検討中）多数のご参加をお待ちしております。

日時：平成十年六月十三日（土）

会場：盛岡市上田公民館 会議室

ご出席される方は事務局までお名前と交通費金額、宿泊の可否をお知らせください。

あとがき

新社会人となる皆さんへメッセージを届けようとして取り急ぎ発行となりました。春は新生活がスタートするとき、異動の時期でもあります。転居された方、または近々予定のある方は新住所を七友会事務局までお知らせください。この会報の宛先があなたの登録されているお名前と住所です。もし古い住所や旧姓のままになっている場合もご一報ください。ご家族からの連絡でも結構です。

*七友会事務局 連絡先

泉澤真結子（MEL東北支社）

〒〇〇〇〇〇〇 盛岡市盛岡駅前通十一十四
TEL 〇一九（六二六）二二九〇
FAX 〇一九（六二九）二六六五